〔座談会〕

「新時代の女子大学教育」

藤原バーバラ（女子大学助教授）
福本　俊之（女子大学教授）
森田　潤司（女子大学教授）
坂本　清音（女子大学教授）
山田　正章（女子大学教授）
小室　節子（女子大学総務課長）
司会　本間　洋一（女子大学教授）

本間　先生方にはお忙しいなかをお集まりいただきましてありがとうございました。

きょうは「新時代の同志社女子大学は」というテーマで、いままでの女子大の歴史と現在の状況、それから今後どういう女子大学に、よりよい女子大学にしていくかという観点から、それぞれの先生方のお話などをお伺いしていきたいと思います。

同志社女子大学も草創期から百二十年という歳月を重ねて参りました。その時代の中で大きく変わった点もあろうかと思います。そうしたこともある程度意識しながら先ず少しお話をして戴けたらと思います。

坂本先生、長く女子大学の教育に携わってこられて、どんなことをお感じになっていらっしゃいますか。ちょっとお話し願えませんでしょうか。

坂本　私、女子大の教育にかかわったのは、年はとってますけれども、間に空白期間がありますので、あんまり長くないんです。だけど、女子大学の学生時代にものすごく自分の人生を決めるようなというか、本当にいい教育を受けたなという四年間を過ごしたということと、そのときに母校愛

というのか、同志社女子大が好きで好きでたまらなくなるような教育を受けたということと、もう十年ぐらい前になるんですけれども、女子部の歴史ということに興味を持ち始めまして、とくにそのころだれもこれまで資料として使っていなかった『宣教師文書』というのに出会いまして、マイクロフィルムを見ながら同志社女学校の初めの歴史の部分にとっても興味を持って、それがおもしろくて夢中になってやってきたということだけなんですけれど……。

それで、自分がいつも思いますことは、いまの自分自身というのが明治の初めのころ女学校で教えられようとしていたことと大いに関係あること、あのときあんなふうな教育があったのが代々の先生方に受け継がれて自分の中にあるのかなと、歴史の研究をしながら、自分自身の発見というのにつながっていっているもので、とっても楽しいんです。それに、この勉強をすればするほど、私たちの学校の歴史というのは、本当に誇りうる歴史だって思うんです。

それが残念なことに、同志社大学という大きな大学がすぐそばにあるために、つい妹分だという感じになってしまって……。だけど、女子部の歴史を勉強すればするほど、共学の大学とは違った歴史、しかもとってもユニークないい歴史があることが明らかになるのです。それがこれまで十分に研究されなかったということが本当に残念で、でも最初のうちは、どうして女子部は同志社のただ一部という風にしか扱ってもらえなかったのかという不平ばっかりがあったんだけど、考えてみたら、誰かにしてもらうんじゃなくって、女子大にいるものがそれをしなければいけないのだと、やっと気がついて、それで、きょうも少し勉強していることなども含めてお話しさせていただこうかなと思って来たのです。歴史というのはよく川の流れに例えられますけれども、同志社の女学校の歴史というのも、四期ぐらいの流れに分けて考えられるかと思うんです。

同志社女子大学のあゆみ

第一番目の時期というのは、川のいちばん源というのか、山の上、高いところで泉がわきだしているというようなところです。明治の八・九年（一八七五～六年の頃）で、同志社英学校ができた年と女学校が私塾として始まった次の年そこからずっと山を下って平地に至るという、その至ったところ辺が新制大学、戦後のその時期かなというふうに考えてみました。

山を下るまでも決して順調じゃなくって、流れは少しずつ大きくはなっていきますけれども、ある部分はとても狭められたり、石や木の根っこに妨げられて進路をゆがめたりしながら下ってくるわけです。そして終戦という時期になって、平地にたどり着き、そこで新制の大学として新しく出直します。平原を流れ始めて、水量も増して、両側の景色というのもずいぶん美しくなっていったということがあって、それから田辺と今出川というふうに分かれたあたりから、ひょっとしたら川が二またになったのかなとか、そのまた二またの中で短期大学部というのができて、その支流というのができてきているのかなという感じです。これ迄は幸い水量が十分あったのですが、最近全国的に雨量が減ってきて、この先はどうなるのか、川が涸れてしまうのではないかと心配されてもいます。

第一期の山の上の泉のようというのには

森田潤司氏

福本俊之氏

藤原バーバラ氏

象徴的な意味もあるんです。まず山の上ということとか、わき出るというので、それはまさに新島先生なり、アメリカから渡ってきた宣教師たちが祈りと共に希望に燃えて、神によって建てられた学校というのを目指して始まったことを意味します。当時、日本で女子の教育は全く顧られていなかった時代ですから、女子部はまさにエリート中のエリートを育てる場、そこの学校に来て学んでいる者というのは、国中の女性たちをどう引っ張っていくか、自分たちの生き方そのものが日本の女性の生き方を左右するというような意気込みみたいなものを持って、勉強していった時代だと思うんです。

新島先生はアメリカにいる間にご自分の体験・勉学を通して、ぜひとも日本にキリスト教主義の男子のための学校をつくろうという意識に燃えて帰っていらっしゃったわけなんです。そして、英学校をつくってから、やはり女子教育も必要だというふうに考えて、その翌年に女学校をつくったと言われていますけど、そうじゃなくって、新島先生ご自身の中には、自分の生涯をささげて女子教育をしようということは、少なくとも日本に帰ってこられた時点ではなかったと言っていいと思います。

確かに向こうですばらしい女性たち、クリスチャンの女性たちに出会われて、日本の女性とは違うアメリカの女性にはものすごく印象づけられて帰ってこられましたけれども、そういう女性を育てる、じゃ学校は、という意識はなかったのです。というのは、新島先生が勉強されましたアーモスト大学のすぐ近くに、アメリカの女子教育のルーツであるマウントホリオーク・セミナリというのがあるんですけど、帰国迄に一度も訪ねていらっしゃいません。女子教育の重要さを十分認識していたのは、むしろ宣教師たちです。同志社英学校とほぼ同じ頃にできる神戸女学院の前身である神戸ホームの成立にかかわっていた特にJ・D・デービス宣教師が「京都に英学校をつくるんだったら、ぜひとも女学校もつくるべきだ」と考え、英学校発足の準備のかたわらアメリカン・ボード本部に、京都の女学校のための婦人宣教師の派遣を依頼していたのです。もちろんできたのは一年遅れてだけれども、とにかく英学校ができて、さァ次に女学校、という感じじゃなくって、

小室節子氏

山田正章氏

坂本清音氏

同時にその必要性を認められて準備は始められていたということです。

それと、アメリカン・ボードの宣教師たちのいちばんの目的は、もちろんキリスト教を布教しようということだったわけですけれども、実際にとくに婦人宣教師たちが日本に来て、日本の女性の姿を見て、彼女たちが一人前の人間として扱われてないことにびっくりするわけです。当時の日本は儒教思想の影響で女性は男性よりも劣ったものと考えられ、絶えず三歩下がって歩かなければならないとか、三下り半を出されたらすぐ離婚が成立つような、同性である女性がそんな生き方しか日本ではできてないということが、ものすごいショックでもあり、驚きだったわけです。ですから、ぜひともこの同性の教育を通して解放するために自分たちは働きたい、――勿論キリスト教教育を通してということですが――と考えたわけです。実はその時期、日本では女子教育が非常に疎かにされており、確かに明治五年かに学制が発布され、小学校教育は男女共義務化されるわけですが、実際学校に行っている女子はとても少くて、女子教育というものがなかったも同然なのです。明治十五年、官公立の女学校が全部で七校しかなかった時に、キリスト教主義の女学校は二十五校、更に明治二十二年で比べますと、官公立女学校九校に対して、キリスト教主義の女学校五十五校にもなります。それは伝道にやってきた各派宣教師達が、大切にされていない、教育も受けていない女性に驚いてしまってできるんです。だから同志社女学校は京都では最も古いキリスト教主義女学校ですし、アメリカン・ボードで言えば二番目、関西以西のキリスト教主義の女学校で言えば四番目になります。同志社女学校の草創については……、御所の中の柳原邸という、全部で五十ぐらい部屋のある御公家さんの御屋敷で、スタークウェザーという宣教師や新島八重さんによって始められた。それはいろいろなものに書いてありますので今日はいいと思いますけれど……。以上、第一期といいますのが明治の九年から明治二十三年ぐらいまでの、まさに日本のパイオニア的な役割をする時代です。

第二期は、明治二十三年教育勅語が発布され、日本の右傾化が始まる時期と一致するのですが、この時期キリスト教主義をや

本間洋一氏

めたり、つぶれてしまう女学校があちこちで出て来ます。しかし、同志社女学校他幾つかの基礎のしっかりしていた女学校は、各種学校に変ってもキリスト教教育を貫き、かつ女子の高等教育を目指して、普通科の上に高等科とか専門科とかというのをプライベートに設けて、女子の高等教育をする努力はずっとしているんです。第二期は明治二十三年以降、明治三十七年日露戦争勃発の頃迄で、川の流れは狭くなったけれど、水はますます澄んでいった時代と言えるかもしれません。

第三期というのは、日露戦争が終わって、女子の高等教育が漸く構想されるようになるいわゆる降盛期とか充実期に入ります。専門学校令というのが一九〇三年に出まして、一九〇四年に日本女子大学校・女子英学塾（今の津田塾）・青山女学院英文専門科ができて、一九〇九年に帝国女子専門学校（今の相模女子大学）・神戸女学院というのが専門学校になって、その次一九一二年、同志社女学校は日本で第六番目に専門学校（正式名同志社女学校専門学部）になったわけです。

こんなに早い時期に専門学校が正式認知されたことは同志社女学校の歴史で誇りうる部分だと思いますし、その十年後一九二三年、いちはやく同志社大学（共学）への編入資格があったというのもすごいと思うんです。それは同志社大学が、私学で一番、国立を入れると第三番目に共学を認めた大学ということでもあるんですけれども。同志社大学は予科修了生と共に、初めは英文科卒業生だけだったのですが、他の高等学校と並んで、「同志社女子専門学校の生徒に限っては入れます」とします。それを設けたのは一九二三年のことだったと思います。

だから、まず女専として世間的にも認められるような非常にレベルの高い専門学校であったこと、同志社大学への編入制度があったこと、そして当時は、随意科目という名前でいまで言う自由学芸科目、リベラル・アーツの教科を必修科目の半分ぐらい、とるというふうになっていた。しかも講師は殆ど京都帝国大学の先生だったと言われています。即ち高度のリベラル・アーツの教育を大事にしたということなどがこの時期の特色と言えると思います。

そしていよいよ第四期。山を下りまして平地に行って新制大学になる。それまでは女子教育というのはもちろん別学でしかありえなかったから女子専門学校であったのですが、ここで初めて共学対女子大という構図が出てくる終戦後ということになります。その時期に同じ同志社という法人の中に、四年制の大学の共学があって、さらにその中に四年制の女子大をつくるのか、つくらないのかということがとっても問題になった時期です。

日本中の学校法人を見ても、四年制の共学大学と、女子短大が組み合わされているのはいくらでもありますけれども、四年制の女子大学と四年制の共学大学があるというのは唯一同志社だけなんですよね。ついこの間も女子大学創設の頃の資料を見ていて、同志社大学文学部長名で、同じ法人内

に四年制の女子大は不要、短大で十分という意見書を見て唖然としたのですが、学内外共にいろいろ意見があったようです。ヒバード先生という女性宣教師が、同志社女子大学の初代の学長なんですけれども、進駐軍から、「あなたたちはどうするのか。いままでは女子専門学校として成り立ってきたけれども、今度は中学か高等学校というレベルに下がるか、あるいは同志社大学の学部の一部としてそこに吸収されるか、リベラル・アーツの四年制大学として進んでいくか、その三つの道しかありません」というふうに言われたと回顧録に記しておられます。女専の先生たちはそれで、リベラル・アーツの四年制の大学として進んで行こうと決意し、校名も同志社ウィメンズ・カレッジ・オブ・リベラル・アーツにしたわけです。だからそこでまたもう一度リベラル・アーツの教育というのを大事にした新しい大学を目指して出発したのが第四期ということです。

新制大学として再出発した時の特色でしょうか、科目に聖書・人間関係・日本語作文などが必修でした。

本間　日本の教育も中国の影響を受けたわけですが、儒教的な社会の中でそれまでずっと教育が行われてきた。そういう中で女子教育というのは非常に軽んじられてきたということは歴史の事実だと思います。それを新島がアメリカに行くことによって、あるいはそれが媒介になって、女子教育というものの大切さが見直されてきた。勿論明治の最初のころでも、女子教育というと良妻賢母という方向が非常に強かったんですけれども、新島の考え方、人間尊重とか、男女平等とか、いかにもキリスト教的思想的な視点から女子教育というのが打ち出されたというのは、いまはもう当たり前になってしまいましたけど、あの時期とすれば画期的なことだったと思います。そこに同志社女子大学のルーツがあることは誇ってもいいことだろうと思うんです。そこで、どういう女性を育てようと思ったのか、新島の中である程度そういうことを追うことが可能か、あるいは代々の学長、あるいは学生たちがどんなふうに考えて、同志社女子大をどんな大学にしていこうと考えていたのか、その辺のところはどうなんでしょうか。

新島の女子教育観など

坂本　新島先生がお亡くなりになるのが明治二十三年で、同志社が始まって僅か十五年間だけ、ということなのですが、さっきも言いましたように、女子教育そのものには帰国される迄はあんまり興味はなかった。でも、実際に関わっていく中で、どんどん新島自身も積極的になっていくんです。それに十年間のアメリカ滞在中に新島自身が身につけた女性観は日本古来のものとは違っていたと言えると思います。それで帰ってすぐ、これもいろんなところに書いてありますけれども、「自分はどうも日本で奥さんは見つかりそうにない」って言うんですよね。きっと十年ぶりに帰ってきて、ご両親たちも早く結婚したらというふうな話になるんだと思うんですけれども、自分は「東を向いてなさいと命じたら三年でも東を向いている東洋風の婦人はご免です」と言うんです。当時、日本の社会の中で男性が、あるいは夫が右を向いてなさいと言うたら、言われるままに右を向いているのがいい女性とされていた時代だと思います

ので、新島自身はその点は違ったと言えましょう。もっと女権――女性の権利が認められる世の中にならなければいけないとか、これは亡くなる一年ぐらい前に言っているんですけど、佐々木豊寿という人に向かって「女子がせっかく女学校に行っていろんなことを勉強しても、卒業したら全然それを使わなくって、学ばなかったような裁縫とか料理とか、そんなことばっかりするのは本当に残念だ」と言っています。ですから彼自身が女性に求めたもの――御世話になった女性ハーディ夫人やシーリール夫人のイメージもありますでしょうか――それが日本の女性に向かってもどんどん開かれていってほしいと願っていたということは、彼のいくつかの言葉からも言えるんですよね。

でも、実際に教育そのもののカリキュラムをどうしようかとかうんぬんということになると、宣教師たちが中心になって、彼女たちがアメリカのセミナリ、十九世紀の初めぐらいからアメリカで女子教育がものすごく盛んになるんですが、そこで実際に体験した、しかもキリスト教の教育というのをやろうとするわけです。だから新島の影響というのは、彼自身ときどき女学校に『聖書』なんかを教えに来たり、礼拝の時間に話に来たりするものですから、それを通してもあるのだけれども、むしろ新島が育てた男子学生たちを通してあるのじゃないかと思うんです。同志社英学校の第一回の卒業生宮川経輝、加藤勇次郎のお二人の方が卒業直後女学校の教師として赴任して来るわけですけれども、彼らが新島先生から受けた良心教育であるとか、新島先生が八重さんと一緒に人力車に乗るとか、八重さんと「さん」づけで呼ぶとか、当時の日本では本当に驚くようなことを実際にしてみせた。それを見ていた生徒たちが自分が結婚する相手に対してもそうしたとか、あるいは生徒をそういうふうに扱ったという部分があって、新島の教育観というよりも実生活を通して教えた人生観・女性観が間接的な形でまず伝わっている部分もとっても大きいと思うんです。

本間　ずいぶん古い時代のところからずっとお話を伺いましたが、最近のとくに戦後の同志社女子大学というのもまた大きく変わった時期だろうと思うのですけれども、その中で教育を受けてこられた方もたくさん出ておられると思います。ここにおられるお二人の女性の方もそうだと思うんですが、小室さんはいかがですか。小室さんの女子大学のころというのはどういう世界、どんな雰囲気がありましたか。女子教育というか、ちょっと大げさな言い方になりましたけど、女性が教育を受けるという点で対社会的に、あるいは自分自身としてどんなふうに考えておられましたか。

同女のよさ
―卒業生として思うこと―

小室　私は戦後間もなくではないんですけれども(爆笑)、一応いまの時期で言うと古い時代ですから、九州から出てくるときに兄が、「なぜ女子大に行くのだ。女が大学に行ったらろくなことはない。理屈ばっかりこね回して、行く必要ない」というような、言ってみれば、むだ遣いみたいな感じでは言われました。

同志社とかかわったのは女子大に来てからなんですけれども、その中でどういうぐあいに女子教育があったかというような難しいことは私は研究もしておりませんの

で、ただ、肌に感じたことを言わせていただきますと、「自由」という言葉が再三授業の中で使われていたなというのを、いまちょっと坂本先生のお話を聞きながら感じました。授業の中に人間関係というような授業科目があったのです。どちらかと言えば、大学に来てまでこういう科目があるのかなと、ちょっと変な気もしたのですけれども、先ほどから坂本先生のおっしゃっている原点はそこにあるんじゃないかなァと思いますね。

そういう意味では、べつに私はキリスト教信者ではないんですけれども、受け入れやすかったんです。その中で「愛」とか、そういう言葉を常日頃聞かされてきましたけれども、それが素直に聞けるような伝統といいますか、建物で言えば栄光館みたいな古い伝統を偲ばせる所があって、そこで静かにパイプオルガンを聞きながら、そのことを考えたときにはやはり素直に受け入れることができたと思うんです。そういう環境が自然に女子大の中にはあったのではないかなと思うんです。理屈ではなくて情緒的なもの、そういうものが何となく先生と学生と肌を通して感じられたような気がします。

本間　同志社女子大学はどの先生にお聞きしても、教員と学生の接する態度が非常に細やかだとおっしゃる。それは新島先生が学生一人一人を大事にしようとおっしゃったことと常にかかわってくると思うんですけれども、あまり大きな大学にならないということで、ある程度教員と学生のコミュニケーションがとれる、理想的な状況にあるような気がするんですけど、昔からやっぱりそういうところはあったということですか。

小室　授業の中でも新島先生等が話の中に出てきたりということで、本当に「人」というものを大切にしているんだなというのは感じられましたね。

森田　きょうのテーマは女子教育ということですけれども、いまの話の中に出ているのは女子大学の中での女子教育ですね。そうすると、共学のほうの同志社大学の中での女子教育ということと、女子大学の中での女子教育というものがどういうふうに違うのか、別個のものがあるのか、共通のものがあるのか整理する必要がありますね。

先ほどからのお話を伺っていると、女子大だからよかった、女子だけでよかったというような話も出てますね。じゃ具体的に――「自由」とかそういう言葉で表現されるのだけれども、どういうところがよかったのか。それは坂本先生が「いい教育であった」と言われる部分は何なのか。それは共学でない、女子大だからそうだったのか。或は、そういうことを抜きにして同志社という環境の中でのことであったのか。その辺卒業生でないものとしては非常に興味があるし、ぜひ伺いたいところなんです。司会者みたいなことを言って（笑）。

本間　いや、ありがとうございます。いかがですか、坂本先生、小室さん。

坂本　私自身、それこそ共学を逆に知らないものだから、比べてみてどうこうというふうに言えないんだけれども、まずよかったなというのから。私たちの世代というのはまだまだ女性というのが人前に出ることが――さっきは明治の話でしたけど、明治をずっと飛び越えて、昭和なんですけれども（爆笑）、まだまだ女性が自分から何か意見を人前で言うというようなことはしないほうがいいみたいな風潮でしたね。

そういう中で、私が当時の学長であった滝山先生によく言われたことは、「自分から、手を挙げて意見なんか言わなくて宜しい。ただ指名されたらちゃんと考えていることをきちんと伝えなさい」ということなんです。求められた時にはちゃんと答えなさいというわけです。それでも当時としてはとても新しかったと思うんです。控えめに、でも出番が来たら(笑)、自信を持って、何か後ろからそっと肩を押してくれるような教育を受けた気がするんです。出しゃばる必要は全然ないけれども、自信をもったらいいんだ。求められたら、そこで引っ込むんじゃなくて、ちゃんとしなさいというように、絶えず励ましてもらったというのか、自信をもたせてもらったという感じがします。それからこれは同志社全体かもしれませんが、神の前では教師も生徒も同じということがあって、一対一で先生が学生に接してくださっている。一人前の人格としてこの先生は対面して私の話を聞いてくださっているという思いは本当によくしましたね。

そこら辺、それは女子大なのか、同志社なのかということですけれども、そういうふうに思って――それから一般的にはよく男子がいないから、長というか、すべてのことを女子がしなければいけないからというようなことはよく言われますね。そこで、今の男性教員の方々が学生に、一人の人格としてしっかり受けとめて、立ち向かって要求してくださっているかなっと思うんですが、それはどうでしょうか。それをぜひ聞きたい。ちょっと話が現代に飛んじゃいますけれども。

「自己存在の自覚」を促す

森田　要求しているかどうかは何かわからないけれども、いまの女子教育の歴史を伺っていても、寺小屋とかそういう下のレベルの女子教育はあったかもしれないけれども、高等教育については女子は疎外されていたということがあると思うんです。女子は別枠で高等教育をせざるを得なかった。つまり最初から排除されていたから、別枠として女子専門学校とかいろんな形のものができてきたのでしょう。そうした歴史の中で一つよかったのは別枠であったために存在感というのか、自分がそこにいるということを女子が自覚できたことでしょう。先ほどの男がいないから女性でみなしなきゃいけないという、具体的にはそういうことになりますけれども、そういう形で自分が学校、つまり社会の一員であるということを自覚できたこと、そういう道が新しくできたということは大きな意味があるんじゃないかと思うんです。

先ほど話があったように、女子大学はずっと少人数できたという、その少人数であったことも非常に重要なことであって、これが大人数であったら、女子だけであっても個人個人が自覚すること、つまり自分がそこにいるという存在意識を持つことができなかったんじゃないかと思うんです。いま女子大は規模的には大きくなっているから、その辺が問題になってきているかも知れませんね。いま女子大として大事なことは、一人一人の学生が自分はここにいる、自分は学生として女子大にいるんだ。逆に言うと教師はじめまわりから期待されているということを自覚できるような状況づくりをしなきゃいけないんじゃないかと思うんです。何も自立を要求するとか、そういうことじゃないんだけれども、学生一人ひ

とりがそれぞれ大学の一員であると自覚することが大事なんじゃないでしょうか。

坂本　だからそれには私は学生を一人前に扱うということ、それがとっても大事だと思うんですよね。

本間　小室さん、どうですか。

小室　私もなぜ女子大に入ったのかなという気もしないでもないんですけれども(笑)、女子大に入ってよかったなと思ったのは、自分の持っているエネルギーを一〇〇%使うことが女子大ではできると思うんです。高等学校のときは、共学でしたから自分では言いたいな、もっとこういうやり方もあるなということがあっても、やはり男性がポンと言ってしまえば、それに負けてしまうという状況でした。戦後の教育で言いたいことは言わなきゃいけませんよという教育を受けながら、反面言い過ぎもいけないよというような教育を受けてきていましたから、そういう中では女子大の中で自分の持っているエネルギーを一〇〇%使い、先ほどの森田先生の存在感にもあるんですけれども、やっぱり私がここにいるんだというのは、女子大に来てしっかり感じられることだったと思うんです。

本間　そうすると一応新島が考えていた、あるいは歴代の同志社女子教育を考えていた方々の、言うならばありようというのに添う形でずっと戦後歴史の中を流れてきたと言えましょうね。女性の尊重というのもある程度、もちろんまだまだ不徹底なところはあると思いますけど、かなり状況的に変わってきたということがありますか。かつての女子教育擡頭のころとは、だいぶ社会的な事情も変わってきた点はありますか。

坂本　それはあると思います。先程は私の体験を言ったのですけれど、今の時代、黙っているということは、その人は意見がないということだから、だから女性はだめだ、もっともっとどんどん積極的に言っていかなければいけないとかというふうに言われてますよね。でも、そういう教育を受けていると、なかなか自分からは言い出せないこともあります。でも、発言することは大切ですし、それが称賛されるように変って来ているようにも思いますね。

本間　新しい時代になってきて、表現する女性がふえてきた。そういう意味では音楽は自己表現という世界にはまってくる、まさにそのぴったりの世界だと思うんです(笑)。福本先生も長い間、同女の教育に携わってこられて、どんなことを時代の流れの中でお感じになっていらっしゃいますか。

福本　まず最初にお断りしておきますと、私はきょうここにそれを勉強させてもらいに来たので――(笑)。どう変わってきたかと聞かれると、ぼくはいまちょっとそれはわかりません。もう一つ、ぼくがわからないことがありますのは、私が行きました音楽大学、私が行ってましたころはたぶんどこもそうだったみたいですけれども、まず九割五分から九割九分は女性なんですね(笑)。

坂本　九割九分は女性？　先生の時代に？

福本　ぼくが行ってましたころの音楽大学というのは、たぶんどこも時代的には男子が音楽をやるというのはまだ大変少なかったんです。たぶん私の行きました東京の大学でピアノ科に行ったのは京都では私が初めてなんです。ですからそういう意味でいいますと、私は女子大の中で育ったともまた反面言える(爆笑)。そういう人数的な

割合から言いましたらね。

それで、学生のときに見ていた女子学生像というものと、同志社女子大学の女子学生像というものと、そしてまたもう一つは、女子大の音楽科の女子学生像というものと、少し違うようであり、同じようであり、同じようであって、また違うという。だからいまのご質問にどうお答えしていいのか(笑)ちょっとわからないというのが私のいまの気持ちなんですが。

坂本　ちょっと質問していいですか。少なくとも先生が行ってらした大学の女子学生像と、同志社女子大の女子学生像とどの辺が微妙に、どういうところが違います？

福本　まず一つ違うことは、私の育った学校がもともと演奏家を育てるという趣旨の学校でしたので、女性が積極的に自分のやりたい勉強だとか音楽もやらざるを得ないわけですし、積極的に取り組むし、ほかの大学の学生が学生時代をどう過ごすかという過ごし方とはまったく異質なものがありますので、だからある部分、生き生きしている。とても元気がいいんです。でも、それはそのことに関してであって、常日ごろはそれほど変わらない。だから、その辺の見方がちょっとぼくにも何とも言えないんですけど、答えになりますでしょうか。

坂本　目的を持ってちゃんと入っているということでしょうね。女子大の場合はそうではないということでしょうか……。

リベラル・アーツと専門教育
―期待されているという意識の涵養―

本間　同志社女子大はどちらかというとリベラル・アーツ――坂本先生の先程のお話にもありました――という専門教育とも、また違った意味での高等教育でしたよね。そういう意味では、福本先生がおっしゃったお気持ちも何となくわかるような気もします。

ところで、リベラル・アーツという問題は非常に大きな問題ですから、本当にもしこれからの同志社女子大学を考えていくとしたら、その校是にまで踏み入ってでもご意見をお聞かせいただけると本当はありがたいんですが。とくに英文科はごく初期からありましたし、外国の文化を日本に紹介するとか輸入するとかというような意味で、かつては先端的な一つの分野であった――いや、今だってそうだろうと思いますけど、山田先生いかがでしょうか。

山田　のっけから大変な問題をふられてしまいました(笑)。

本間　ちょっといろいろ話をまぜていただいてけっこうですけど。

山田　正直言ってはっきりした考えがあるわけではないのです。実際、時代によってその中身も変っていますし。ただ今普通に理解されているような、教養課程の一般教育科目がリベラル・アーツかというと個人的にはそんな気しません。今僕は英文科にいて英文学の授業をしているわけですが、それが法学とか政治学とか、かつての一般教育科目とは別の専門科目なのだ、という意識にはなれない。文学というものの性質かも知れませんが、かなりリベラル・アーツの要素があるんじゃないか。それは何かといわれれば困りますが。ただ女子大だけが曖昧にしろ、昔からのその伝統を受け継いで、それを表に掲げてきたわけです。そのことは尊重したいです。そして、より良くしたい。僕は、リベラル・アーツってもともと曖昧なものだと思いますから、新しい、そしてふさわしい意味なり理念なり

を創り出すという意識に帰ってもいいような気もします。無論それはかつての一般教育担当の先生方だけの問題ではなく我々全体の問題でしょうが。

本間　皆さんそれぞれリベラル・アーツについては、いろいろ各人なりに考え方がいっぱいあるだろうと思いますけど、音楽と並んで森田先生のところなんかはわりと専門的な、ある意味では技術能力というのを踏まえた研究的な能力も必要な分野だと思うんです。そういう分野から見たリベラル・アーツってどんなことを思われますか。

森田　リベラル・アーツというのは、学生側からみると履習の方法だと思うんですね。坂本先生の話に出た随意科目があることですね。その場合、カリキュラムには他分野の専門科目が並んでいなければならない。それが教養的な科目・概論的科目を置くこと、或は概論的に教えることととらえるとちょっとおかしくなる。どんな科目を置いても一つ一つはその道の専門科目でなければならないと思います。

それで、専門の部分、学問の部分について言うならば、女子だからというような特別な方法というのはないとぼくは思うわけですよ。ですから、この部分については過去もそうだっただろうし、これから先も共学であれ、女子大学であれ、男であれ、女であれ、共通の方法があり、共通の考え方でいくだろうし、教育方法についても共通であろうと思うんですよ。母性などに根ざした女性特有の考え方などがあるかもしれないけど、それは小さなことではないでしょうか。異論もあるかも知れませんが。

そうすると、先ほどの話に戻りますが、女子大での女子教育ということになると、学問以外の部分が重要になるんじゃないかという気がするわけです。それはクラブ活動であり、いろんな学校の行事であり、そのほか学校全体の雰囲気とか、そういうことで何を学生たちに与えうるかと、そういうことになるんじゃないかなと思うんです。それが一つ。

もう一つは、そう考えながらも、学問分野について実際には毎年むなしい思いがしないわけではない。というのは、女性の社会進出が多くなったとはいいながら、卒業していた学生のうちの何割が自分の希望する職種なり、そういった分野で活躍できているかというと、まだまだ現実は非常に厳しい。

それから、まだまだ女子学生の学問や職業に対する意識の中に低い部分もなきにしもあらずと思うんです。これは間違っているかどうかわかりませんけど、ぼくの印象ではそういう感じがする。だから学問について熱心かというと、必ずしもそうでない場合もあるんです。毎年むなしい思いというのは、これが男子学生だったら自分の知識なり技術なり、いろんなものがすぐ生かされて、また次世代に受け継がれるのであろうなと思うわけだけれども、それがここで切れてしまうなと。そうすると、卒論のことをとくに言うわけだけれども、技術とかそういうことについてはむなしい思いがすることもあります。

ただ、先ほどの方法論ね、そういったものについて、具体的な細かい知識とかじゃなくって、どうやって何を仕上げていくかという方法論について、これについては身についていくだろうし、また引き継がれていくだろうし、そこの部分にかけざるを得ない。言うてみれば、それが胎教というのか何か知らないけれども次の世代、そういう形で学生の子供の世代に何かが引き継が

れないかなと、そういうことを思うわけです。

坂本　ちょっと質問。先生、男子の場合はやはり専門をずっと生涯する人がほとんどですか。普通のサラリーマンになるという――普通のサラリーマンっておかしいけど、そういう人も多いんじゃないですか。

森田　理科系の男子ならもう九〇％以上がそういう方面の仕事についていますし、仮に商社とかに就職したとしても、専門知識を生かした形が多いので、だから先ほどの話じゃないけど、家事技術とか何とかじゃなくって、結婚しても何かと社会とつながりを持ちつつ、常にその思考方法というか、考え方とかいうのを生かしてくれるんだったらいいんだけど、その意味で切れてしまうケースが多い、そういう意味で言いました。

坂本　いま大学は大衆化されているというのか、高卒のかなりの数が行くようになって、かつて勉強するために来たという時代はかなりなくなってきているんだ。そういう学生ではないということはある程度意識しなければいけないとか。

森田　先ほどぼくが言った意味がそこにあると思うんですよ。そうかもしれないけれども、その一人一人の学生に自分はここにいるんだという意識、そして自分は期待されているんだという意識を持たせることができるかどうかというのが非常に重要で、みんなそれぞれ可能性を非常に秘めて入ってくると思うんですよ。仮に入ってきたとき意識がよそにあっても、学校全体がそういう雰囲気であればそっちのほうへ向いていくし、そういう教育ができたらなと思います。

本間　女子教育は、まだ前時代的なものを引きずっている部分も多分にありますので、それを解消し、新時代にふさわしい女子教育の可能性を追究してゆきたいというのは多くの先生方の思いではないかなと思うんです。まだまだ過渡期であろうというニュアンスが森田先生の話をお聞きしていても感じられると思うのですが。

そういう意味で、現在の同志社女子大学の状況と、これからどんなふうにしていったらいいのか、どんなふうな夢を描けるのかという話を引き続いてしていきたいと思うんですけれども、学生の教育について率直に、現在やっておられて、それぞれの先生方、いまどんなふうなことを感じておられるか、というあたりから少しまたご意見をお伺いしたいと思いますが、山田先生、どうですか。

学生の人格を尊重しているか？

山田　さっきの問題ともちょっと絡みますけれども、さっき坂本先生が、われわれに質問されたことなのですが、我々が女子学生を一人の人格として扱っているかということ、そのことにさっきからずっと引っかかっていたんです。たとえばぼくですと、女子大で教えているときと、ほかの学校へ行って、仮に男子ばかりを教えるとします。その時、違う教え方をするだろうかなということをちょっと考えていました。それで、違ってはならないと自戒を込めて思うのです。でも、そこで引っかかってしまいました。男女の別なく同じように一人の人格と向き合っているのだとしますと、女子ばかりの女子大であるということの意義は何だろうか、と。教育という点だけでみると、女子大以外の大学とどう違うんだろうか、ということが分からなくなった……。

坂本　でもそれは根本じゃないでしょうか。それでもう一つ、私はレベルを下げて教えてないかということを聞きたいんです。この程度でいいんだ、わからないんだからと。

山田　レベルによって教え方を変えていかなければならないのは女子であれ男であれ同じだろうと思っています。たぶん先生がおっしゃったのは、女子だからというので甘やかしていないかと、そういう意味だろうと思います。そういう意味でも、同じように扱うべきとは思うのです。実行が伴うかどうか、それはちょっと恥ずかしいのですが。ただどうしても頭をかかえてしまうのは、女子大という教育の現場にいて、女子大の教育ということを意識した場合、何でも同じであるべきだとしますと、それはその通りだと思いつつも、何かどこか変だな、という気がする。女子大であるということの意義、無論いい意味でのそれですが、それがないものかなと思います。むしろ、それを探りたいという気がします。

坂本　じゃ、先生は違ったふうに教えていらっしゃるわけですか。

山田　さっきも言いましたように、同じであるべきだと思うのですが、無論いい意味で違って欲しいという気もします。女子にしかない優れた面、そんなことを意識するのは良くないのでしょうか。

坂本　それよりも、先ず教員が学生に対して真剣にぶつかって下さることが大切なのじゃないでしょうか。

山田　それはぼくも大いに同感です。

本間　ぼくには耳が痛い（笑）。

森田　さっきの人格を尊重しているかということで、学生からの意見というか、声として同志社女子大は学生個人個人について構いすぎだという、一人一人をね、もっとより自由にさせてほしいという声が出てくるわけですよね。特に履習科目のことを言っているんだと思うんですが。

坂本　だから、してないんじゃないですか、構いすぎというのはしてないと思います。

森田　してないのかもしれません。現実はそうなのかもしれない。

坂本　もっともっと一人前に私は先生から扱ってもらったと思いますが。

山田　そういうことが言いたかったわけですけど、そういうふうに男であれ、女であれ、分け隔てなくそういう形で教員が学生に対してつき合うと。

森田　学生の中に逆にそれをよしとしている部分もあるでしょう。そうすると、まあ全部じゃないかもしれないけれども、われわれの心の一部に、それに迎合してしまう部分があるかもしれないなという反省はある。

坂本　それは私、学生の側に確かにあるというふうに思うから、でもあっても、そうしてほしくないなって思うんですね。

森田　卒業査定とか何とかのときに必ず同情論が出ます。女子だからとかね。それを言っていたんでは、本当の個人の人格尊重にならないと思うんですよ。

坂本　だから私も再試なんかなくしてほしいと思うんです（笑）、ほんとに。

本間　とくに男子教員から多いですね。そういう発想の方が多いんと違いますか。

坂本　私はほんとにそう思います。

本間　そういうところが逆に同女の目指す進路の障害になっているかもしれないという気持ちはたぶん皆さん持っておられると思う。でも、何かその辺で情に流されてしまう。そういう相克（笑）にみんな悩ん

でいるんじゃないかなと思いますね。ところで、さっき坂本先生がおっしゃったように、これだけ大学が大衆化してきて、大学教育はどれ程の意味があるのかということ自体が問われるような時代になってきている。

かつて帝国大学は女性は入れないころがありましたし、ごく限られた人に対してのみ大学教育を行ってきた。帝大は結局国家に有為な人材（官僚）を育てるというのが目標で、それを掲げてやれば良かった。でも今は、そういう素朴？な時代ではなくなったし、数多い大学間の平均化も進んでいる。そんな中で、今後の同女の教育というのは一体どうなるんだろう、どうあるべきなんだろうか。あるいはどういうことを教育し、何を学生に望んで行くのか――もちろん同志社自身のスピリットというのもありますけれども――女子教育全体としても考えなければいけない気がしますが、坂本先生はどうお考えでしょうか。

女子大学の意義と今どきの女学生気質

坂本　まず先に山田先生のとちょっと関係してくるんですけれども、その辺、先に言うていいですか。

論理的にはというか、これはお茶の水か何かに、アメリカの大学の先生が来て講演した話の中にあったんですけれども、共学の大学で教えている場合の隠し撮りを、テレビで映していたらしいんです。そしたら明らかにその先生は男子の言うことに対しては注目して、ゆっくり聞いて、女子の言うことはぞんざいに聞いているというのがテレビに映っているんですって。それは一つの学校の例かもわかりませんけど、「そういうふうなことがあるから、やはり女子大という女子だけの中で、そしたらまったく対等に、男子との比較においてじゃなくって、みんなの意見がしっかり聞いてもらえるという経験をすることができるから女子大は必要なんだ。そういうことが完全になくならないまでは絶対必要なんだ」ということを言われたことがあったのです。

それと、これからどうしたらいいかということをいま聞かれたんですが、私はこの間、一回生の学生と、しゃべっていました。その学生は「大学に入って自分はしたいことがいっぱいあってどれをしてええかわからへん」と言うのです。それで、「勉強したら」って言ったら、「先生、勉強だけはしたくない」って言うんです。だから、あれもこれもしたいものの中に、勉強は入ってないということがものすごくショックというか、驚きだったんです。

でも、またゆっくり考えてみて、彼女が考えている勉強というのは、要するに受験勉強をこれまでしてきて、そういう勉強はきっと嫌だという意味であって、何か本当の意味の勉強というのかな、学問とまではいかないにしても、自分で興味を持って何かを追求していくという楽しさがわかったら、きっとこの学生もこういうふうには言わなくなるんだろう。また別の言葉でそのことを言っているんだろうなというふうに思ったんですけれども。

私はいま短大にいるから思うんですけれども、高等教育の最初の入り口が短大で、しかもたいてい高校を卒業するころには、たまたま英語が好きやから英文科、国語が得意だから日本語文学科に行くとか、そういう学生が殆どです。あるいは入れそう、自分のレベルだからというのがあって、でも一年か二年行っているうちに、自分のし

たいことはこれじゃなかった、本当はもっと別のことだった、別の分野だったというのがわかるのがわりあい大学の一、二年間じゃないかと思うんです。そういうことを発見して、自分の進路をまた新たに始めることができるというふうな意味が短大にはあるのかなって思っています。そのことと、本当にしたい、するためにはどういうふうな、どこに行って、何を調べたらいいのかということがわかること――今のような大衆化された大学ででも、少なくともできるのはそれではないかと思います。

それから、もう一つ思っていたのは、かつて象牙の塔なんて言われていたのは、昔の大昔の話だけれども、まだまだ私の学生のころでも、あちこち気を奪われず、学生の本分である勉強を一生懸命しなさいというふうに言われていた時代でした。しかし、今やそうではなくなって、学生はもっともっと生きた人間、社会と関係のある人間としてキャンパスライフを送ってますよね。でも、社会と関係した人間というときに、彼女たちが考えるのはアルバイト先の社会であり、あるいはサークルが社会という。それでは残念だって思うんです。まあ今回たまたま地震とかということで、いろいろボランティアとして出かけていくという学生たちも多くなってきていますから、もっと社会の仕組みというか、自分でそこで用いられて、それこそさっき森田先生が学校の中でも、そして同時に社会の中でも自分の存在感を体験しながら、絶えず学校と社会とをフィードバックしながら、そこで得た、あるいは疑問に思ったことをまたここに帰って考えながらというふうな大学であったらいいなァ、場であったらいいなァと思うんです。そうですね。

森田　それがもし女子に欠けていたとすれば、そちらを強めるべきでしょうね。

坂本　それをものすごく思うんですね。

山田　その点少しずつ学生たちの意識も拡がって行くのではないでしょうか。以前の女子大、とくに英文科の学科目を見ていますと、どこの大学にも当然設置されている科目が当然のように設置されていて、要するに文学研究でした。それが多少とも、社会学に類した科目や女性学に類した科目が置けるようになりました。実際女性と社会との関わりといった形の研究も可能です。このように少しずつですが、カリキュラムが変って行く方向を大切に育てたいですね。こうした方向は、女子大だからこそ充分に育てることができると思います。

本間　そういう意味で、本当に女性がどんなふうな生き方をするのかとかというような女性学というか、それが社会で盛んに言われるようになったのも、ついここ十年ちょっとぐらい前からでしょうか。そういうところにみんな目がいってなかった、新しいことですよね。だから女子大学の役割というのももう一度見直していかなければいけないようなところはやっぱりあるだろうとは思うんですけど。

坂本　何かそういう科目をもっとふやすということですか。

本間　ふやすことも一つの考え方としてありますでしょうしね。

家政学系は、一般的には女性的な分野だと思われているので、大いに女子大学としての強いアンデンティティーに寄与していると思いますし、音楽もそうだと思うのですけれども。それに比べると、英文学とか日本文学みたいなのは、そういうのからちょっと外れるかもしれないなという感じはするんですね。ただ、従来やられてなかっ

た方向性で、英文にしても日文にしても、女性の視点からものを考えていく――現在の女流作家達にもその傾向あります――ことはできるだろうと思うし、それがある意味では今後の課題かもしれませんね。

教員だけじゃなくて、いろんな場で、学校行事を通してとか、あるいは課外活動を通してとか、職員の方々も女子学生についていろいろ感じるところがあると思うのですけれど。先ほどの話の中でも、女性が社会に出ていける状況がある程度整っているとはいえ、まだまだというご意見もあったようですね。以前就職の部門におられて何かお感じになったようなことございますか、小室さん。

小室　私たちのときは、まず学校へ行く場合大学名で選ぶんですよね。女子大に行くか、どこへ行くか。行くならば同志社か、どこかという感じで。そしてその中で、じゃ何学科を選ぼう、何学部を選ぼうかという形のものが多かったと思うんです。いまの学生は、たとえば英文学をしたいとか、日本語の教師になりたいとか、そういう目的で大学を選んでいる点は、非常に私たちのときとは違った意味でうらやましいなと思います。

余談になりますけれども、私自身はちょっと歴史的なものが勉強したいなと思って母親にそれを言いましたら、「あなたはお嫁さんにならないの？」って言われて、「お嫁さんになる」と言いましたら（笑）、「じゃ家政学部に行きなさい」というそういう時代だったんです。ところが、いまは自分はこれをしたいから、この学校を選びたいという形で入ってきているんですが、悲しいかな、就職のほうの仕事をしておりますと、先ほど森田先生が言われたように、そのまま社会に出て、知識が生かされているかというと、やはりまだまだ難しいんですね。その中で女性の地位向上で、この四、五年就職する人が多くなったんですけれども、何か流行みたいなもので、AさんもBさんも就職するから私もしておかないとという感じもします。まだまだ就職の状態というのはそうなんです。

それと、受験勉強だけをしてきてますから、点数だけが目的みたいなところが学校の中の勉強にもあって、それをどういうぐあいに自分で生かしていくかという生かし方の相談もあったんです。「私はいまこういう勉強をしていますけれども、そうすると、どんな仕事がありますか」というような、これは一つ女子大の特徴かなと思うんです。一つは両親がレールを敷いて、ある程度受験戦争をくぐってきた学生ですから、就職も同じように思っている学生も数にしたら多いんです。これを共学の女子学生と比較するとやっぱりしっかりしているんです。自分たちで切り開かなければと……。先ほど「女子大だと自分のエネルギーを一〇〇％出せるところだ。リーダーシップもとってきたんだ」という話と矛盾しますが。まだそういう学生は少ないですね。

なまじっか、言いたいことは言わなければという世相を反映してか、権利が先に出てきますね。仕事をする意味の社会に出て働くときの義務ということは、まず忘れてしまうという状況があるので、そういうようなものをもう少し何とかできないかなというのは常に思っていることでした。

本間　男性の場合はそういうのがあんまりないという印象でしょうか。学生たちは女だからという。

小室　そうですね、やっぱり生まれたときに男性というのは、「末は社長になろう

ね」とか「何々ちゃん、男の子だから、こういうのは辛抱して」という形で育てられていると思いますけれども、女子の場合は小さいときに、社長になろうね（笑）なんていうことよりも、かわいい女性でいてほしいという両親の願いがそこに一身に集められていると思うんです。それをずっと持ってきていますから、就職の中でもはっきりとそういうことがあらわれてきますね。

社会の変化に対応
―生活科学部のことなど―

森田　いまの権利意識が強くなるという部分はやむを得ない部分があると思うんですよ。一つには就職しても仕事だけで齷齪したくない、遊びたいということがあるかもしれないけれども、一方で結婚などがあって、そう長く勤められない、そういう打算、計算が最初からあると思うんですね。そうすると、いい条件のところを選びたいということになるから、それは権利意識の主張という形で出てくるわけです。

じゃ会社のほうが逆にパーマネントな職業人として女子を期待しているかというと、そうでないということもあると思うんですよ。先ほど小室さんは進学の時に家政学部にしなさいと言われたということだけれども、今度家政学部は生活科学部と名称変更したわけです。それは家政学部に対するイメージが一つ花嫁修業というような非常に古いイメージに固定化されてきた。実際は教育内容は変わってきていたのにかかわらず、外からのイメージとして固定化されてきた。これを何とか打開しなきゃいけないということで名称変更をしたわけです。変更した理由の一つに学生たちが就職活動に行って、「こういう内容のことをやっています」と、いくら説明しようとしても、その前の書類選考とかそういう段階で、「あっ、家政学部ですか」という形でオミットされてしまうこと。これは非常に不満であるということをずっと繰り返して言っているということがありました。そういう意味もあって名称変更したので、これから先、その辺が少しでも改善されればと思うんですけれども。

それと関連して言わせていただくならば、女子大での教育が抱えている問題というのは、家政学、あるいは全国の家政学が抱えていた問題と同じところがけっこうあると思うんです。たとえばこれから先の女子教育を考えていくという場合にも、たとえば一つのポイントとしての生活の基盤である家族とか家庭のあり方、価値感が、一時代前に比べると急速に変わってきてしまっているということがありますね。

それから先ほどから言うように、女性の社会進出がある。ただ一方で、その社会進出を支えるだけの社会的なバックアップというのがあるかどうかということと、いままでは女子教育についてもわりと自分の周辺だけのことを考えていたらいいとしていた。こう言ってはいけないのかも知れないけれども、そこで終わってしまう部分もあったかもしれない。けれども、一人一人の行動が、世界や地球、宇宙のことに影響を受けているという環境問題の顕在化した時代になってきている中で、女子教育をどうすべきかということがあると思うんです。

家政学部でもそんな社会情勢の変化がいろいろ話題になって教育研究対象を家政、家じゃなくって、生活というふうに拡げて、それをいろんな角度から科学的に学問する、つまり生活科学部としたわけです。家

政と言った場合に、裁縫とか何かの日常家事の技術伝達をしているというイメージが一部にあったけれども、そんなことは決してない。名称を変えることで古いイメージを払拭し、同時に実際に教育研究対象に変えてゆきたいというわけです。これからの女子大学での教育についてもそういう社会教育の部分が求められると思うんですね、単なる良妻賢母の女性を育てる教育では……。

本間　それが草創期のころ、実は目指していた一つの形だったと思うんですね。

森田　そうそう。しかし、形だけでならなかって、実際の人たちの不幸があったのかもしれない。

女子大と共学の女子学生
―ちがいはあるのか？―

福本　ちょっと一つ、これまた質問があるんですが、私が意見を述べるんじゃなくって(笑)。いまお話を聞いてますと、同志社大学共学の中の女子教育と、女子大学の女子教育はどう違うのかというお話がまずさっきあったと思うんです。また、これはわれわれ教師から見る問題なんですね。ところが、逆に聞きたいのは、共学にいる女子学生がどう見ているのか、女子大の学生がその女子教育というのをどう見ているのか、そこに何か違いがあるのか、ないのか、その辺はいかがなんですか。

というのは、ちょっと話が飛ぶかもしれないけど、この前、『しばぐさ』編集委員会がおとりになったアンケートを読ませていただいて、あのアンケートを見ると、学生は相当学校をしっかり見てますよ。われわれが知らないようで、見られていることがアンケートにはぼくは出ていたと思うんです。それならば、女子教育というものは、学生から見たらどんなものが逆に望まれているのか、逆の見方もぼくはそこにあると思うんです。だからちょっとその辺のご意見を聞かせていただけたらと、これぼくの質問なんですけれども。

藤原　私もそれに関係して、質問があるんですけれども、学生たちが同女を選んでいるのは、女子大学だからか、それとも同志社の名前を持っている大学のいちばん入りやすい大学だからか、それは分かりませんから、ちょっとお聞きしたいんですけれども。

本間　トータルとして全体的にどうだというのはなかなか難しいですけど、個人的に当たったところだと、知名度の高い女子大だから選んだという子はかなりたくさんいますし、同志社女子大学の持っているイメージというか、それで選んだという子もけっこういますね。勿論どこどこの大学が不合格になったから来たとかという子もいますし……。でもやはり同志社大学と女子大学と両方受かった受験生は同志社大学へ行きますかね。

坂本　私たちのころは違ったんですよ。両方受かったら女子大に来ていたわけですよ。本当に同ヤン、同ヤンって(笑)。京都大学と並んでいるぐらいに思っていて、両方受かったら女子大に来ていたんですね。

本間　ただ、さっき小室さんも言われたかと思いますけど、案外とこういうことをしたい、だからここへ行きたいという傾向はちょっと最近出てきているんじゃないでしょうか。たとえば例を挙げると社内校で、英文科一つとりましても、女子大のほうが英語を重視しているとかということで女子大へ行きたいという声も聞くようになって

きていると言いますね。単に名前だけじゃなしに、実際にどういうところのどういう勉強をしたいんだということをわりとこのごろ、いろんな高等学校の進路指導の先生も勉強されてます。各大学の、単なる名前、同志社という名前だけじゃなしに、あるいはその中身のね、どういうことをきちんと教えているかというのはかなり最近いろんな情報が高等学校の進路指導の先生に入るんです。だから進路の先生が、「あそこの大学のあの学科はこうですよ」ということをわりとよく認識されてますから、そういうところの指導が受験生に行き届いてきつつあって、この傾向はさらに強くなると思いますけれどどうですか、福本先生、先生自身としての実感としては。

「厳しさ」が足りない？

福本　音楽をやってまして、私は基本的に、女子大で女性しか教えてないわけですよね（笑）。それもマン・ツー・マンなんです。これ、男の子を教えた場合に、教え方違うかといったら、たぶん変わらないと思っています。基本的には個性の問題ですから。ただ、音楽で一つだけ女性と男性の違うことはあるんです。これはたとえばコーラスに女性のみのコーラスと混声のコーラスとありますように、オリジナルから違って書かれている部分がある。もう一つは体のことなんですけれども、いわゆる女性は胸式呼吸で、男性が腹式呼吸ってよく言われますね。だからそういう呼吸法の問題においては、これはアプローチがまったく違ってくる部分がたぶんあると思います。これは歌の先生に聞いてみなきゃわかりませんけど、でも基本的には違わない。

そしてさっきの質問、ぼくお尋ねしたんだけれども、共学に行っている女子学生がそこでどう思っているのか、女子大にいる学生がどう思っているのか、女子大にいる学生のはこの前のアンケートを見せていただくと、ずいぶんわかったんですけれども、逆にそこに一つおもしろいと思ったのは、「厳しさが足りない」ということが書かれてある。逆にそうすると、共学で学んでいる、共学の中の女子大生は、じゃどういうふうにまたそういう部分を見ているのか。ひょっとしたらそういう「厳しさが足りない」というセリフは共学の女性から出てこないかもしれない。出てくるのかもしれない。それもわからない。だからお尋ねしたんです。

本間　先生方いかがでしょうか。そういう情報、ぼく自身としては欠落しているんですけど。アンケート、もっとしっかりやれば良かった（笑）。

アメリカではどうなんでしょうか、一般的に言って。女子大というのがありますね。伝統的なのがあって、もちろん共学のところもある。そういう中で女子大と共学の女子の違いというのはありますか。

「厳しさ」の中で意気軒昂
―アメリカの女子大学の学生―

藤原　いまは非常に少なくなりまして、大学の中で女子大は五％になったんですけど……その「厳しさ」はだいぶあると思います。女子大といっても、大きく分けて二つのタイプがあります。一つはその殆どが南部にあって、いわゆるお嬢様の大学。もう一つのタイプは、マウントホリオークとかスミスのような伝統があって、レベルもとても高い、の女子大。そこの卒業生達の

方が、共学の女子学生よりもリーダーになる割合ずっと高いのね。その点、日本ではどうなんでしょうか。そういう違いあるかしら。

坂本　いまの時代ではやっぱり東大とかというところを出た人たちが早くから就職、いわゆるフルタイムな形で、キャリアとして就職しているから、国立のほうがやっぱり多いですよ。津田塾なんかはちょっと出て――それから東京女子大ぐらいはあるかなと思う。押しなべて言えば、国立の共学の女子学生のほうが世に出て活躍しているというふうに思います。

本間　日本の中における女子というものの置かれている位置がまだアメリカとは全然違うからでしょうか。

藤原　それもあると思いますけれど。

本間　どうしてそういう差が出てくるのか、やっぱり歴史的な流れの差が大きいのかなと思いますけどね。

坂本　でも、アメリカはそうなんですよね、女子大卒の人のほうが。

藤原　そうです。もう一つの理由は、女子大でリーダーシップとかクラブとか、それを全部自分達でやらなければいけないのは日本でも同じと思いますけれども、アメリカの場合は、共学教育になると、女子にはどうしても自分の「声（ヴォイス）」がなくなってしまうんです。きょうちょっとティール先生と話し合ったんだけれども、先生は同大の四年生のセミナーでも同じようなことがあるけれども、ちょっと理由が違うと思っているんです。たとえば、日本で女の人と男の人がいれば、だいたい男の人のほうがリードする。それは授業ではっきり見えるとティール先生は言ったんですけれども、アメリカの場合はロマンスのためにね、女子が自分の意見をはっきり言ったり、頭の良さを見せたりしたら、男の人はデートに誘ってくれないとか（笑）、そういうぐあいで、ちょっとあまり自分の「声」を出さないのね。でも、女子大の場合はそういうことが全然ないから（笑）、ほんと、自分の力を伸ばすために何でも自由にできるし、意見とか知識を自由に表現できます。

本間　アメリカでもそうなんですね。

坂本　アメリカでもというか、日本の男性方、どうですか、意見を言わないほうがいいですか、やっぱり（笑）。

本間　日本の男性の問題ですか、これはそうなってくると。

森田　男子教育（笑）。

本間　男子教育が問題なんじゃないですか、ひょっとしたら。ねェ。

福本　いや、だからさっきの話なんですが、女子教育うんぬんと言うんだったら、じゃ、男子教育はどうなっているのだと逆の見方もあるわけですね。

本間　これは目から鱗もんです（笑）。女子教育でなくて、男子教育もやっぱり考えてもらわないかんということですね、確かに。

坂本　山田先生、何か言いたいことあったら……（笑）。

山田　いやあ……ありません（笑）。

坂本　ものを言わないかわいい女性がやっぱりいいんですか。

福本　それは個人の問題ですから（笑）。何か私の周りは強い、いや積極的なものすごく自分を主張なさる女性が多いんです。これ、音楽をやっている関係だけではなくって、だからそういう意味から見れば、私はもの言う女性が好きなんかなァということも思いますね（笑）。

坂本　私は頼りないことないかなと思う

んだけど。ただ、そばでにこにこしているだけでは（笑）。

福本　先生、いやに突込まれますね（笑）。

本間　現在の現場で教育しておられる、あるいは事務をやっておられる方にしても、学生を甘やかすみたいなところはどうしても出てくるということを皆さんおっしゃっておられましたし、学生もアンケートによりますと、実はそういうところが問題だと。それからもう一つ足りないのは活気だということを盛んに言っているんです。活気は自分たちでつくるものだとぼくは思っているんですけれども、それをどうしろというのかなと思ったりもするんですが、その辺のところ、同女へ来るような学生が活気をつくり出すような条件というのは何なんだろうってぼくなんかは教師をやっていて、なかなかつかめません。どうしたらそういう場をつくれるのかな、なんて最近ふと思ったりするんですが、どうでしょうか、その辺のところ。学生が生き生きとして何かやれるような状況を創り出す――創り出すと言っちゃ変かも知れません。本当は学生がつかみ取ってほしいとぼくは思っているのですが、そうはいうもののやはり学生を抱える大学側でもちょっと考えていかなきゃいけないことじゃないのかなとも思うんです。坂本先生が前に仰ったように、肩をそっと押してあげるような気持ちでいいんではないでしょうか。同女のかわいくて、品行方正な女性を育てる路線がいつもブレーキになっていて、こうしちゃいけませんという「教育的指導」が何かというと出てきて、結局やろうと思ったけど、できなかった。そんな体験をしている学生が結構いるんですけど、どうでしょうかね。

「活気」が足りない？

坂本　目覚めてわりあいやるという学生は一部にはいるんですよね。積極的にどんどん言ってくるような学生は研究室に訪ねてくるし、半年位の間でもびっくりする程しっかりしてきますよ。私は一つは、さっきからこだわるけど、一人前に学生と先生が対峙しているかどうかってことですね。そういうときの話し合いの中で、そういう応対をするということも学生にとって本当に嬉しいことだと思いますよ。

それと、私も学校の雰囲気として気になることというのに活気がないと言う学生に対して、「あんたがまず動いたらいいんだ」というような話をしたことがあるのですけど、本当にそう思いますね。だからどうしたら活気が出るかということなんですけれども……。

本間　単なる印象に過ぎないんですが、ぼくも共学の大学を出た人間で、どっちかというと、汚いところで育ってきた学生なものですから、同女がきれいすぎる（笑）――何か混沌としたところがなくって、何をやるにも汚しちゃいけないみたいな雰囲気が何かあるような気がして。たとえば学内で何かギャラリーみたいなものでもつくって絵を掛けたりするこうなことがちょっとはばかられるというか、そこはそのためにあるんじゃないから使っちゃいけないよみたいな、そういう大学側の一つの姿勢みたいなものがあって、学生たちの動きを奪っているようなことはないのでしょうか。

たとえば新入生の歓迎のクラブ勧誘みたいなものも、「入学式のときはちょっとビラを配るぐらいの程度にしときや」とか、キャンパスへ戻ってくると、「もうしたらあかん、汚れるし、あんまりせんといて」みた

いな、がなり立て声挙げちゃいかんとか、そういうわりと何か絞ってしまうようなことはないのだろうか。ぼくらの学生のころやったら、本当に入学式の時なんか会場から出てこようものなら、頭をこづかれるなりして、何々クラブへ来いとかという手荒い勧誘もありました。それで講義が始まっても最初の一週間かそこらはキャンパスの至るところに机が並んでいる。「入りませんか」とか何とか言いながら寄ってきて、ひどいときは手をつかんで引っ張って名前を書かせるとか何か、そのぐらいのことまでやる。そういう何か喧騒やごちゃごちゃしたところが一種活気を生みだしているようなところがあったんじゃないのかなと。それから比べると、整然としすぎているというか、そこは同女のしつけのよさでもあるかもしれませんが(笑)、そういうところもすごく感じるんですけど、どうでしょうか、その辺は。

坂本　私はきれいであるということは女子大学としてわりあい大事な、いいことかなとか思うんですけど(笑)。たとえば男子を入れないというんですか、門衛さんがすぐ自転車で追っかけてきますよね。先生とかお客さんでも、この間も資料室の人が会いに来られて、あとから門衛さんが自転車でとっとっとっと、何かと思うたら、「その人、だれや」(笑)とかいう感じで言われていてね。それはたまたま一つの例ですけれども、確かに規制が厳しいというのかなァ、それは思いますね。

まず事故があったら大変とかというようなことを思って、事故が起こらないように起こらないように。それは一応責任者の方はそういうふうに思わざるを得ないのか知れないけど、大事なことは、だれでも事故に遭うことはいくらでもあるわけなのですから、むしろころんだときにどうしたら立ち上がれるかというそこを教えたらいいのであって、「どんどん行ってころんできなさい」って私は言いたいくらいです。その辺は私にとっても歯がゆいというのか、あまりにも過保護という部分が学生たちの手足を動かせなくしているのじゃないかなという気はしますけれども。

本間　何かとセーブされた形になることもあるらしくて、思いを発散できないところがあるんじゃないのかなと思ったりするんですね。結局それは実はカリキュラムのあり方にも共通していて、そういうところから更に「しばられている」という意識が広がってきて、たとえばこういう科目、この学年にしかとれないというのは何か困るなァとかというふうな意見が出てきたりする。枠にはめすぎじゃない、というわけです。結構活動的な学生と話をしていると、そんなことをよく言ってくれます。

坂本　カリキュラムは選択の巾が増えるように変更されますね。

本間　はい、なりますね。ずいぶん変わると思うんですが。

福本　同志社女子大学というのは、世間ではある程度お嬢さん学校と思われてますよね。学校はある程度管理をして、だからお嬢さんと、学校も思っているんですよ。だからある程度管理して、事故があっちゃいけない。さっき先生がおっしゃったように、一ぺんけがしてもいいんじゃないか、ということになれば、学校が一ぺん学生の管理をもっと取っ払えばいい。だけど、学校にそれだけの腹がありますかということがありますよ(笑)。

本間　なるほどね。実はアンケートをやったとき非常に強く感じたことなんです

が、「同志社女子大学って、本当にいい大学なんだ」ということを学生がずいぶん言っていたんです。これはぜひ言っておかなきゃいけないんで。入ってくるときの学生の状況というのはやっぱり入試を通って入ってきますので、ほかの第一志望に落っこちて多分に挫折感を持っている子もいるんですけれども、出ていくころになると、同女で勉強してよかったというのが八割以上、学科によっては九割になるようなところもあるんです。やっぱりこれは四年間、あるいは二年間というサイクルの中で大学教育はかなり、まあ教員側の評価はともかくとして、学生のほうにはかなりいい意味での効果は与えているんじゃないかなとぼくは正直言って思っているんですけれども。教員はいつも毎年同じことをやってる感じがぬけませんけど、学生は本当に一回こっきりですからね、大学四年間、あるいは二年間というのは。そういう中で、学生はかなり同志社女子大学のありようについて好感を持ってくれていることも確かだということがわかりました。嬉しい誤算です（笑）。

それから同時に、もうちょっと大学として何とかならんのか、同志社女子大学をもうちょっといい大学だということを知られるようにしたらどうかと、むしろ言われたぐらいなところがあるんですけど、どんなふうにそれぞれがお感じになっておられますか。山田先生、どうですか。お食事の最中すみませんけれども、いまスーと目がいきましたので（笑）。

人間としての「心」を育てる教育をめざす

山田　ここへ来て言いたかったことが一つだけあって、それはぼくなんかが言う資格は全然ないんです。言えばぼく自身ただただ恥ずかしくなるだけなのですが。でも思いきって言いますと、われわれ教員が学生と接しているのは一週間のうちの九十分ですね、一人の学生に対して。それも何十人もの学生の中に一人で入ってゆくわけです。それで自分自身にものすごく限界を感じてしまうことがあります。先生方はどうお考えでしょうか。お話したいことは、使い古しの言葉ですが、情操という言葉なんです。ぼくは頭の古い人間かもしれませんけど、ぼくがしたいと思ってできないことが情操面のことなのです。でも、ぼくなどまるでできないことがうちの大学ではできる。つまり宗教教育です。本当にうまく機能して欲しい。無論関係の先生方は大変な努力されておられるのは知ってますし、それに対してわれわれのようなものがほとんど協力もしてないという事実も踏まえた上で勝手なことをお話しするんですけど、やはり教育の中でそういう情操部分はかなり大切な部分だと思うんです。そして、そうした部分は宗教の中で最も美しい部分の一つでしょう。知識を教え込むだけじゃなくて、むしろ人間としてそっちのほうが大切だと思いたい。だからうまく機能させるために宗教教育を拡充しろとなれば賛成します。ただいろんな先生方の努力にかかわらず、これまでのところ、成功したって言えるんでしょうか。自分を棚に挙げて本当に失礼なこと言ってますが、これは本当に頑張って欲しいという応援のつもりです。建学の根本ですから。そして、うちの大学は最後にはそこにすがるしかないのですから……。それが、今度の震災の動きに関してもぼくはちょっとがっかりしてます。なぜもっと学生たちは学校をせっつくみたいに立ち上がってくれないのかなァ。そういう

教育ができなかったら、我々の教育のある部分は失敗だったんじゃないか、という気がするのです。情操と言っても、べつに礼儀がどうこうというんじゃなくて、心の豊かさ優しさ、人の痛みが分ったり、うまく言えませんが、例えばそんなことです。つまり信仰が育ててきた美質です。それを大切にしようと始まった学校だと思うんです。そういう意味で、今度の震災で学生達がどう動くかは、我々の教育に向けられた問いかけのような気がするんです。今お話ししたこと、批判だと思われてしまうと本当に困ってしまいます。我々全体の問題だと思いますから。

坂本　それもだから、それこそ歴史的に言えば、昔はまさに社会に出ていくキリスト教教育を受けていた、実施していたわけですね。それがいつからか保護主義になってしまって……私の学生時代もそうでしたが、他人のことを気にかける間があったら先ず自分の生活を整えなさいという風に変って行って、むしろ社会から隔離して純粋培養しようという傾向が強くなって来ていたのではないでしょうか。今やもっともっと社会とかかわって、自分が何をしなければいけないのかということが考えられ、自分で決めて行動できるような教育をしなければいけないと思いますね。

だからといって、私は毎日のチャペルがなくってもいい、それは役に立ってないとは思いません。そこでしっかりいろいろ話を聞いて考えて、そのことが実際に行動と結びつくような、一歩社会に足が出るようなそのもとになるものだというふうに思うから、活気的な何かができないかって先生おっしゃるけど、じゃたとえばどういうことが何かあるかと。

山田　例えば些細なことですけど、以前、宗教部の方でボランティアの活動をやっておられると聞きました、老人ホームかどこかで。あれをなぜ単位にしてやらないんだろうかという思いがずっとありました。それで今度のカリキュラム改正の動きの中で実現できないかと、学科の中でも話題にしたのですが、いろんな経緯があってうまくいかなかったようです。宗教部と関わりないところで立消えになりました。でも信仰はある面実践ですから、今も実現したい。大学の姿勢だと思うんです。

坂本　というより、ボランティアの単位化というようなことは宗教部ではできませんね。宗教部が科目を提供できるとは思いませんから。それに本来任意であるものを単位として認めることにはいろいろ意見があるようです。でもボランティアに対しては、もっと積極的であって欲しいと、私も心から思います。

山田　そうした活動から学びとれるものは、ぼくらがいくら教えようとしても教えられない非常に大切な部分でしょうし、とりわけ、我々の大学は大切にすべき部分だとも思うのです。

坂本　そうです、本当にそう。でも、今回かなり学生はボランティアしてますよ。この間も短大から芦屋高校避難所にお惣菜など持って行った折、「先生！」って出て来た学生がいましたが、住んでる所は四条畷で、昨日でテストが終ったので、ボランティアの登録をしておいたら、ここに派遣されたと言っていました。リーダース・トレーニング・キャンプとかで訓練を受けたリーダー達が、リトリートとかキャンプのリーダーだけでなく、こういうボランティアというのか、何かという時、組織的にネットワークがつくれるといいのですが。

本間　短大部の先生方がその中に入って動かれ、学生も動いていますから、それが良い手本になるかも知れませんね。考えが及ばない、自分は駄目だなあと思いましたが、教員のあり方自身も問題だというふうになりますかね。

坂本　それは思いますね。私など、ボランティアをしたいという思いはあっても日頃自分でやってないものですから、どう動いていいかわからない。本当に駄目だと思いました。

本間　学生だけでそのまますぐ大学と関係なく出ろと言っても、これはまったく大変なことで教員自身がどういうふうに各自かかわっていくかというところがやっぱり大きいんでしょうね。それはむしろ学生について、そういう教育を教員がやってきたかというよりも、教員が率先してやらなかったというそういうほうが大きい――これは自分の懺悔も含みますが。

昨今の女子大学事情
―日本とアメリカの違い―

話はちょっとずれてきましたけれども、学生がある程度満足している。満足していって、教員がそれでその上にあぐらをかいていていいことではないと思うので、新しい女子大学としてどんな方向でこれから取り組んでいくのか、非常に厳しい状況もある。言われているような女子大離れとか、短大離れとか、それから十八歳人口の減少とか、いろいろな問題がここ何年かの間にどっと積み重なるようにして課題として出てくるのじゃないかなと思います。

そういう中で、同志社女子大学としてはどんなことをやっていかなければならないのか。大学としての自己点検とか評価とか、そういうことも勿論あるんですけど、いちばん考えていかなければいけないのは、同志社女子大学としてどういうふうに更にイメージアップさせながら、大学を社会の中に知らしめていくかということなんじゃないかなと思うんです。それは個々の先生の仕事ぶりということも勿論あるとは思うんですが、また、その次元とは別に、大学自体として何か社会にインパクトというのはちょっと大変なことでしょうけど、そういうものを学校としてやっていかなければいけないと皆さん思っておられるようです。その辺なんかどうなんでしょうか。理想的な学生、どんな学生を送りだすということともちろん絡んでくるとは思うんですけれども。これから厳しい状況になるということはもちろんわかってますが、そういう中でこんな方向があるのじゃないか、大きな話でけっこうですから、何かあったら是非お話しいただきたいと思います。

藤原　その女子離れはなぜですか。前は坂本先生は彼女の時代には同大と女子大に受かったら女子大を選んだと仰ったけれども、今選ばないのはなぜでしょうか。

本間　どうでしょうかね。入試のほうから見て女子大離れって。共学志向ということになりますかね。これは特にここ四、五年ぐらい前からだいぶだんだん顕著になってきているような感じがしますね。どういうことかといいますと、女性の進学率は男性に比べて非常に最近上がってきています。十八歳人口は全体的に下がってきているんですけれども。ところが、その上がった女性の進学率の分が女子大学志向にならない。共学に流れていっている。ですから結果的にそれだけ女性の進学率が上がっているにもかかわらず、どっちかいうたら、

女子大学のほうがだんだんそのシェアの率が共学に比べて下がってきているという数字の傾向ですね。それが一つ。

藤原　たとえばアメリカで女子大はいま五％になっているのですけれども、日本ではどうでしょうか。大学の全体の中でどのぐらいのパーセントになっているかしら。

本間　ちょっとその数字は存じませんけど。一方でもう一つ言えるのは、女子大学を共学にするという大学が次第に出てきてます。

藤原　それはアメリカでも七〇年代にだいぶありました。女子大だけじゃなくて、私立の男子大も共学になったり。けれど、最近の女子大生は女子大を積極的に選んでいるんですね。私はドキュメンタリーを自分のゼミの学生に見せたんだけれども、カリフォルニア州にあるミルズ大学では、女子大学から共学大学に変えようと思ったんですね。学生たちが集まったグラウンドに、学長が出ていって、「これから共学になる」と言うと学生たちがものすごく興奮してみんな拳をふり挙げて「ノー、ノー」と叫んだんです。そのビデオを私のゼミの学生に見せたんです。学生たちは「ノー」があまりわからなかった。みんな「イェー、イェー」と聞こえた（笑）。そこで、うちの学長が、「これから同大になると言ったらどう思いますか」と聞いたんです。みな喜んでいました。それは「女性問題」をテーマとするゼミの学生でね。ものすごくがっかりしましたけど（笑）。ほとんど、三分の二ぐらいかな、その理由は私にははっきりわかりません。もう少し学生と話し合ったほうがいいかもしれないんだけれども――就職に有利だからですか。

森田　就職もあるし、もう一つはいまの高校生を含めて若い女性の中に、仕事上分担、とくに家庭とか職場での性役割分担を否定する傾向が強くなってきていると思うんですよ。それと、先ほどの女子大生というのにやはり良妻賢母というイメージがある。私はそういうかわいいだけの女の子にというか、女性にはなりたくないという層がけっこうふえてきたんじゃないか。だから共学志向が強くなったのではないか。一方は裏側にかわいい女の子になりたい意識は非常に強いんだけども、表向きの理由としてはそういうのを否定するとこがけっこうありますわ。

藤原　それはおもしろい。いまアメリカではその反対です。強い女の人が女子大に行きたい（笑）。その反対ですね。

森田　だから十年だか二十年おくれているんですよ（笑）。たぶんアメリカの女子大が共学になったのと同じようなことが先ほど言ったように家政学部の中にあるわけですね。一九九二年四月現在、家政学部のある大学が国公立と私立を合わせて三十六あるわけですけれども、そのうち共学は私学で六校しかない。私学は三十一校ですけど、三十一のうち六校しかないわけです。それが共学に変わりつつある。それは女子大が共学に変わるのと並行になっているということがあると思う。その中で一つは家政学離れ、さっきの家庭とか良妻賢母とかという古いイメージに対する反発というのがあると思う。

本間　と同時に、大学自体も女子大だけでやっているよりも、受験生をふやすためにどうしても共学にしたほうがいいという財政的なメリットというか、そういうことがけっこう大きい比重になっていることもあるんじゃないですか。

森田　それはある。市場が二倍になるん

ですからね。でも、それは世の中のニーズとマッチしている話でもあるでしょう。

藤原　小室さんに聞きたいと思うんですけど、前は就職課にいらしたでしょう。就職の場合は、共学の卒業生と女子大の卒業生ではどちらが有利なのでしょうか。

小室　私も企業の人にそれはよく聞く質問なんです。たとえば入社試験ですね、就職試験のときにはやっぱり差が出ているようです。それはどこの差かというと、共学で来ると「私が、貴社を希望したのは――」というのはすごいんですって。それは男性とのやりとりの中でのすごさであって、そういう意味ではちょっとおとなしいなという雰囲気を、どうしても女子大の女子に感じてしまうということでした。それから入社後は女子大出の女子社員だ、彼女は共学出の女子社員だという見方はまったくないとのことです。用意ドンというスタートをかけると、女子大の女性というのは、どちらかといえば、お先にどうぞという姿勢があるらしいんです。共学のほうは、ドンと言ったときにはワァッと行くんだけれども、しかし、長い目で見れば、女子大だからというおくれはまったくありませんということはおっしゃってました。むしろ細かいところによく気がついて、女子大出のほうがこの職種には向いているなというのが中にはあるそうです。

本間　時間が経過したわりには何かあんまり――女子大学のイメージアップ、そういうところにまでいかなくて、何かどちらかというと、沈滞ぎみの感じがして、こっちとしては切ないんですけど、この辺でドーンとアドバルーンを打ち上げるぐらいの――ああ、これは中味のないもんに譬えてしまってすいませんが――何かありませんか（笑）。

こんな女子大学・女子学生を
―今思うこと―

福本　本間先生とか山田先生とかの若い先生方が、じゃこれから女子大学をどういうふうに創造されるかということを逆に聞かせていただきたいと思います。

本間　（笑）若いっていったって、そんなね、もう四十過ぎたおっさんですよ。

福本　でも、うちの大学ではまだ若いほう（笑）。

本間　どうですか、山田先生。

山田　沈滞させた責任はぼくにもあるんですが――（笑）。それで、さっきの女子大離れですけど、一つは先生方はみんなご存じだと思うんですけど、カリキュラムのこととかかわるんですけど、女子大を選ぶときに学科の選択肢がないんですよね。どこの女子大もそうだと思うんです。文学系統か家政科、うちも基本的にそうでしょう。ところが、いまの若い人たちは情報社会に生きてますから、いろんなことに関心があって、いろんなことがしたいわけでしょう。共学の大きな大学ですと様々な学科があって学生の要求もかなり満たされますが規模の小さい女子大ですとそこがうまくいかない。そういうことも女子大離れの原因の一つでしょう。しかし、これは技術的に何とか対処できることです。つまり、多様性に応じたカリキュラム編成をするということは技術でできますから、そこは頑張れば何とかなると思います。でもそれで将来の見通しがバラ色かというとそれはどうか。たまたまぼくは英文科に所属してますから英文科を意識してお話することになりますが、ぼくはこの先の就学人口の激減という

状況を考えますと、もう英語だけで四年制・短大併せて五百名といった学生を集めるのはかなり困難なのじゃないかと思います。共学の同志社にも大きな英文科があることですし。それで今後は大きな組織の変革も視野に入れるべきじゃないでしょうか。それと、同じ受験生の激減という状況から、この先、以前にはなかったような低いレベルの学生も入ってくると予想されます。能力や意欲のある学生は、ふさわしいシステム、つまりカリキュラムですが、それを与えてやれば、本当に素晴らしく成長して行ってくれるでしょう。そのためには本当にいいカリキュラムを作ってやらねばなりませんが。問題は、それ以外の学生達です。恐らく今の学生達よりはいろんな意味でレベルの低い学生達だと思うんです。その学生達にどう接し、どう育て上げてゆくか、女子大の将来はむしろそこにかかっているんじゃないでしょうか。そして、多分、うちの大学のリベラル・アーツの伝統が生きてくるのならば、そこじゃないかと思うんです。知力・学力だけでなく、拡い意味での人間性を育てるような教育が。まあ、そういった意味あいでも、リベラル・アーツの新しい意味づけが気になります。

それに付けたりになりますが、若い教員に授業の負担が過重になっていないかなどとも思います。授業外の雑務も含めてですけれど、もっと勉強しなければいけない若い人がへたばらないような配慮も必要ではないかと……。

本間　年配の教授の先生のほうが時間数が多いというのは国立大学では普通で、助手とか助教授はそれより少なくって、研究と学生の指導にゆとりがあるというのが本当でしょうけれども、でも同女の場合はわりとそうかもしれませんね、若い先生のほうに負担がいっているというのは。

山田　見ているとかわいそうなぐらい、成績表なんかもうこんな分厚いの、教務から持ってきますね。

本間　いろいろ立場とか置かれている状況もあるんですが。教えるのに男も女も変わりはないじゃないかというけど、現にわれわれがいるのが実は同志社女子大学という、ほかならぬ女子大で、女の子の教育をするという立場にあるわけで、そういうことになってくると、男も女も違わないというその線、もちろんそれは正しいことだろうと思うんですけれども、さあ、だからといって、同志社女子大学の教育も同じでいいんだよということでいいのかどうかというのが最終的な問題になってくると思いますけど。結局、ぼくらは現にいるのが女子大だ、その中でどういうふうにして女子大というのをより魅力的なものにしていかなければいけないかというところがやっぱりいちばんの眼目だと思うんです。

それじゃ、女子大の教育というのは今後どうするのかと、福本先生がさっき若い人の意見を、と言われましたので言うんですけど、ぼくとしては、社会に出ていく女性、社会で仕事をしていく女性というのを育てたい。そのためには何が必要かというと、いまの同女の体制で本当にいいのかどうか、ぼくはちょっとクエスチョンです。出ていけるような状況の教育を本当にしているかというと、まだそこまでは行ってないと思う。だからこれが今後の同女の課題じゃないかなと。

そのためには何をするかというと、もちろん専門教育もそうですけれども、さっきいろいろ森田先生なんかもおっしゃった社会的な意味での女性のものの見方みたいな

ものも、もっと学生に鍛え込んでいく必要もあるだろうと。お嬢さん教育ってもちろん大事だと思うんです。それを否定はしませんけれども、社会を見る目みたいなものもやっぱり育てていかなきゃいけないと思うんです。そういうことになると、大学の中だけで全部やるということは到底不可能なので、その辺のところを大学としてどう考えていくのか。

それから同志社女子大学というのは、どっちかというと、教養教育に負っている、リベラル・アーツというふうに言ってますけれども、それよりもっと社会に出て、じゃ何ができるのかというもの、教育というか、そういうものはどう考えているのか、考えていかなきゃいけない。関東のほうの女子大なんかもみんな同じだと思いますけど、いま何でもって変わろうとしているかというと、いまの社会の動きの中で、どういうふうに大学としてその流れの中に棹さしていけるかという方向に変えてきているように思うわけです。ただ、職業教育も含めていろんな意味での教育を考えていかなきゃいけないと思うんです。今回は新しいカリキュラムになったにしても、そういう点がまだまだ、学校としてどのぐらいまで負えるのかわかりませんが、その辺のところが不足しているんじゃないのかなという感じはします。学生のニーズに傾ける耳があってもいいのじゃないかとも思います。

たとえば資格をとったりするというのがどれほどの意味があるんだという先生がいらっしゃる。けど、そうじゃなくって、そういう機会を与えて勉強してもらうことで、一つの世界がまた別に開けてくるわけですね。そういうことも含めて、いろいろな多角的なもの、社会を学校の中に取り込んでいけるようなものを用意していかなければいけないんじゃないのかなと。

たとえば最近話題になっている情報教育とか、そういうテクニカルな面もね、精神性も大事ですけれども、テクニカルな面もある程度大学として整備してやっていかなければいけないような気がします。もちろんいまの小学生がそういう情報教育を受け始めている。それが十年たてば大学に来て、もう一丁前になっているから大学でやる必要はないじゃないかという先生もおられるけど、でも、その段階になれば、また別の意味での十年後の情報教育ってあるわけです。そういう流れに対応していく教育ということも考えてほしい。流動的過ぎるかも知れませんが、そうでないと、胸張って学生たちも社会に出ていけないのではと思うし、学校としても、お茶くみますよ、お花いけますよだけじゃやっぱりだめだと思う。大学でやっている専門で、四年間で教えられることなんていうのは範囲もたかが知れていると思うんですよ。そういう意味では、いろいろな意味での勉強できる場みたいなものと情報を取り入れていくような形にしてほしいですね。それをふまえた上で、社会で仕事ができるような女性に育っていって欲しい。たとえば日本だけじゃなくて、アジアのほうに卒業生を出して、そういうところで語学を教えるなり何かできるようなそういう情報も出してほしい。と同時に、これは何も大学側の問題ばかりじゃなくて、一方で重要なのは、実は父母の気持ちも変えていかなければいけないんではないかということ、そんな気もするんですよ。女子大に送ってきている父母というのは、もちろんそれぞれのご両親の理想というのはあると思うので、そこをやめろ、だめだ、間違っているとは言えませんけど、

そうじゃなくって、そういうのをむしろ弾力的に受けとめながら、「でも、それでいいんですか」みたいな、何か大学としてもう少し女性が社会に出て行く時に肩を押してやれるようなことをやっていかないといけないんじゃないのかなと思うんですけどね。そういうところをある程度実現してやっている学科もぼくはあると思うんですよね。音楽にしてもいろんなとこで演奏会を開いたりするというのは、やっぱりインパクトは強いですし、それから栄養士みたいな仕事で社会にどんどん出ていって、専門的な仕事をしている人もいると。その点ぼくらもある意味では専門的な社会的な活動の場に学生を出していきたいなと思ったりするわけです。

山田先生はレベルの低下を気にされてましたね。ぼくなんか思うけど、同女のいまの状況ですけど、偏差値にして六十に近いでしょう。先生なんかは下だと思うかも知りませんけど、自分自身の学生のころを考えると、ぼくはそんな偏差値のいい学校じゃないんですよ。だからある意味では、すごくできる子が多いんだと思っているんです。このまま行くかどうかわからないですよ。確かに先生おっしゃるように、下降するかもしれないんですけれども、だけど、学力が落ちるということは、もちろん問題はあるんですけれども、日学の一期生なんかは、学力は——もちろんかなり難しかったとこありますよ、よかったけれども、入ってからそんなできない人もいました。だけども、人間的には非常に魅力ある子が多かったですね。ところが、だんだんたつに従って、できるんだけれども魅力がいまひとつというのがあるんですよ。それは日学の先生方はたぶんみんな実感しておられると思う。大学の中でいろんな行事にかかわって旗を振るような面白いのがいたり、教員に噛いつこうというのがいたり——からかわれもしましたけど——そういうものすごいエネルギーを持ったのがいっぱいいたんですよ。だけど、いま本当にきれいに輪切りになって、優秀な人が入ってくるわけ。偏差値六十前後の。だからそれを考えていくと、いまの同女に入ってきている学生というのは、学力という意味では、入試のテクニック的なこともあると思うんですけれども、やっぱり優秀な学生だとぼくは思っています。だからこれをうまく、どういうふうに育てていくのかは、むしろぼくらに課せられた問題があまりにも大きすぎるという、むしろそういうふうにぼくは感じているんですけどね。

ぼくが前にいたところは、短大で俗に言うレベルの低い学校でしたから、そういうことから比べると、同女というのはすごく恵まれている。しかも教員の研究条件もぼくはけっこういいほうだと思うし、そういうところで、むしろ教員がもうちょっと頑張っていくというか、発奮していかなければいけない要素というのはやっぱりあるんじゃないのかなと思うんですけどね。まだ五年しかいませんから、まだその辺は許されるだろうと思って、これで十年いてそんなこと言ったら、「おまえェ」とか言われて袋だたきにあうんだろうと思うんですけど(笑)。

たぶん関西圏のほかの大学の先生もやっぱり同女の先生と言えば、それなりに認めていると思うし、いいですねっておっしゃる先生も多いので、そういう意味では教員もしっかりせないかん。職員もしっかりせないかん。学生だけがいいのが入ってきて、というんじゃやっぱりまずいと、ぼくはだ

んだんそういう気持ちになってきているんです。だから学生ももちろん成績のいい子は欲しいですけど、多少偏差値が下がっても、おもしろい子が入ってきて、キャラクターのいい子が入ってくれれば、ぼくはいいなと。ただ、出すときね。

山田　そういうことも意識すれば、つまりたぶんいちばん悪いパターンは、ごく少数のよくできる学生と、大多数の全然意識のない学生、これ伝染しますからね。そうならないようにするためには、ある特定のよくできる学生には社会に出れるようにやらねばならない。意識の低い学生には人格を磨けるような教育をせなあかん。そういうような二またをかけねばならないんじゃないかなという。

本間　それはあるかもしれない。

坂本　山田先生が正直に、しかも真剣に同女の将来を考えられてそういう危惧を抱かれる気持ちは分からなくもないのですが、私は入学前から特定のよく出来る学生と、意識の低い学生と二つに分けて対応することにはものすごい抵抗があります。結果としてそうなるにしても、全体に高いレベルのものを示し、チャンスを与え、また意識の向上に向けて、諦めないで語りかけてゆくことが大切だと思います。それぞれに与えられているタレントは実に様々ですけれど、入学時より卒業時迄に、それぞれのレベルで少しでも向上し、自分の力に自信を持って世の中に送り出せたらいいなと私は思います。だってキリスト教主義の教育を校是としているのですから。

それと、抽象的かも知れませんが、人生八十年を意識した大学教育も考えたいですね。女子大学・女子教育ということと直接関係するか否かよく分かりませんが、平均寿命の長い方が女性で(笑)、最晩年を一人で生きて行く確率は女性の方がはるかに高いのですから（笑)。

本間　まだまだ本当は話は続きそうな感じがするんですけど、話したかったことはたぶん皆さんまだもっとあって、言い切れなかったところもあるかと思うんですが、残念ながら、そろそろ時間で、話も一応この辺までということにせざるを得ないんですけれども、きょうはどうも本当にお疲れさまでございました。至らない司会ですみませんでした。

今後とも、同志社女子大学がよりよくなるように、教職員共に、あるいは学生の皆さんにもご協力願って、努力を重ねることができたらと念願しております。どうもありがとうございました。

同志社談叢

第十三号

論　文

アーモスト大学のクラス・デーと
新島襄の日本語演説……北垣宗治
同志社英学校の開発主義教育……佐野安仁
新島襄「自責の杖」事件の謎（上）
—徳島猪一郎の同志社退学をめぐって—
……本井康博
新島襄の大学設立運動（五）……河野仁昭

資　料

同志社職員録—昭和二十一～二十三年度……
同志社職員録—昭和二十二年度……
新島襄に関する文献ノート（その一）
……河野仁昭

（頒価一、〇〇〇円）

発　行・同志社社史資料室
取扱い・同志社収益事業課
電話（〇七五）—二五一—三〇三七・八